

平成 17 年 12 月 5 日

各 位

会 社 名 株式会社総合医科学研究所
代表者名 代表取締役社長 梶本 佳孝
(コード番号 2385 東証マザーズ)
(URL. <http://www.soiken.com/>)
問合せ先 取締役財務部長 田部 修
(TEL . 06 - 6871 - 8888)

子会社の設立および当該子会社と日本たばこ産業株式会社 との間の共同研究契約に関するお知らせ

当社は、平成 17 年 12 月 5 日開催の取締役会において、ウイルス学・分子生物学の権威である東京慈恵会医科大学・微生物学講座第一の近藤一博教授（後記<ご参考> 1 . 参照）と共同で、ウイルスを用いた疲労バイオマーカー等の事業化を目的とした子会社（株式会社ウイルス医科学研究所、以下「ウ医研」といいます）を設立することを決定いたしました。また、ウ医研は、平成 17 年 12 月 5 日、日本たばこ産業株式会社（東証一部 2914、以下「JT」といいます）との間で共同研究にかかる契約の締結に合意いたしました。以上の事項につきまして、下記のとおりお知らせいたします。

記

子会社の設立について

1 . 設立の目的

生体は様々なウイルスに感染しています。近藤一博教授は、ヒトヘルペスウイルスをはじめとする生体に長期間・持続的に感染するウイルスを研究テーマとしています。

このようなウイルスは、通常は病原性が低いものですが、遺伝的要因や体調の影響等により、様々な疾病を惹起することがあります。また、このようなウイルスは、ほとんどのヒトが感染しており、体調の変化等によって発現量や活性を変化させることから、それ自体が、生体の状態を定量的に評価するためのバイオマーカーになり得ます。当社が推進している「疲労定量化及び抗疲労食薬開発プロジェクト」においても、ヒトヘルペスウイルスによる疲労度の測定方法の有用性を確認しております。さらには、ヒトヘルペスウイルスは極めて広範囲の細胞種に感染性を有することから、病原性を除去したウイルスが、高い遺伝子導入効率を持った優れた遺伝子治療用ベクターとなることが期待されます。

ウ医研では、ヒトヘルペスウイルスをはじめとする生体に長期間・潜伏感染するウイルスについて、その再活性化や疾病を惹起するメカニズム等を解明し、さらにはベクターの実用化を推進することにより、ウイルスによる様々な疾病における臨床評価技術、治療法、医薬および食品等の事業化を目指します。

なお、当社と近藤一博教授とが共同で特許出願をしている発明（後記<ご参考> 2 . 参照）につきましては、ウ医研に権利を移転して事業化を行うこととしており、また、今後得られる知見についてもウ医研を主体として知的財産権を取得していくこととしております。

2. 設立する子会社の概要

商号 : 株式会社ウイルス医科学研究所
代表者 : 高橋 丈生 (当社取締役)
所在地 : 大阪府豊中市
設立年月日 : 平成 17 年 12 月 8 日 (予定)
主な事業内容 : (1) ウイルスに基づく、健康および体調に関する評価、診断、治療法に関する研究および開発
(2) ウイルスおよびウイルスに関連する遺伝子の影響を主体とした各種疾病にかかる医薬、診断薬、食品、医療技術および医療用品の研究、開発および販売
決算期 : 6 月 30 日
資本の額 : 50 百万円
株主構成 : 当社 66%、近藤一博教授 34%

ウ医研と J T との間の共同研究契約について

1. 共同研究の目的

ウ医研が有するヒトヘルペスウイルス測定による疲労度等の評価およびヒトヘルペスウイルスに関連する潜伏感染タンパク質に関する情報および技術と、J T が有する新規アビジン様タンパク質 (後記 <ご参考> 3. 参照) を用いた、疲労度の評価および潜伏タンパク質の定量を可能とする技術の開発の研究を行います。

2. 共同研究の概要

共同研究の期間 : 平成 18 年 1 月 10 日から 2 年間
主な研究テーマ : (1) 疲労定量評価技術への新規アビジン様タンパク質の応用研究
(2) 新規ウイルスタンパクに対する新規アビジン様タンパク質の応用研究
その他 : J T はウ医研に対して所定の研究費を支払います

当期の業績にあたる影響について

ウ医研は当社の子会社となりますが、初年度における損益は軽微である見通しであり、当社グループの当期の業績に与える影響も軽微であると見込んでおります。

以 上

<ご参考>

1. 近藤一博教授略歴等

(学歴および職歴)

1985年	大阪大学医学部卒業
1990年	大阪大学大学院医学研究科博士課程修了(医学博士)(高橋理明教授に師事)
1991年	大阪大学微生物病研究所助手
1993年～1995年	スタンフォード大学留学(Edward Mocarski教授に師事)
1996年	大阪大学医学部微生物学 助教授(山西弘一教授に師事)
2003年	東京慈恵会医科大学微生物学講座第一 主任教授

(専門研究領域)

ウイルス学、分子生物学、免疫学

(研究活動等)

日本ウイルス学会評議員
日本疲労学会理事・事務局長

2. 現在出願中の特許について

HHV-6 および HHV-7 ベクターの治療への応用 (PCT/JP2004/012487)

遺伝子治療においては、治療用遺伝子を治療の対象となる細胞に届け、その細胞の中に放出する技術が必要になります。体外から治療の対象となる細胞に治療用遺伝子を運ぶ役割をするのが「ベクター(運び屋)」です。ウイルスは、細胞に感染し、その細胞内に自らの遺伝子を放出して増殖をする性質を有していますが、このウイルスの性質を利用して、無害化したウイルスに治療用遺伝子を閉じ込め、細胞内に届ける技術を「ウイルスベクター」といいます。従来、ウイルスの感染能力を利用するウイルスベクターは、治療用遺伝子の導入効率は高いものの安全性の面で劣るとされていましたが、本発明は、ヒトに持続的に潜伏感染する、もともと病原性の低いウイルスであるヒトヘルペスウイルス(HHV-6 および HHV-7)を利用した導入効率と安全性の両面で優れたベクターであり、癌やAIDS等の遺伝子治療への応用が期待されます。

疲労度評価方法 (PCT/JP2005/012962)

ヒトが疲労したり、体調が悪くなったりした場合に、口唇ヘルペスや帯状ヘルペス(帯状疱疹)を発病しやすくなることは経験的に知られています。通常のウイルスは、宿主である細胞が死滅すると自らも死滅するのに対して、ヒトヘルペスウイルス(HHV-6 および HHV-7)は、宿主細胞の健康状態の悪化を感知して細胞の外、特に唾液や皮膚の表面に逃げ出す性質を有しており、これが口唇ヘルペスや帯状ヘルペスを発病するメカニズムに深く関与していると考えられます。本発明は、このヒトヘルペスウイルスの性質を利用し、体液中のヒトヘルペスウイルスの発現量を測定することにより、日常における疲労度を簡便かつ定量的に評価できる方法です。「疲労定量化及び抗疲労食薬開発プロジェクト」においてもその有用性が確認されており、医療の現場や医薬品・食品等の臨床評価だけでなく、診断キットの開発による疲労度の自己モニタリングの実現にも繋がる技術として期待されます。

3. JTが有する新規アビジン様タンパク質技術について

JTが有する新規アビジン様タンパク質は、アビジン同様の強いビオチン結合性を持つ他、大量生産や遺伝子組み換えが容易であるという特色があり、医学を初めとする多くの分野での応用が期待される物質です。一方、ウ医研の有するウイルスを利用した疲労・体力の測定法は、蓄積した疲労を測定する方法のスタンダードとなり得るものであり、これを家庭用および開業医用に普及できれば非常に大きな市場が期待できます。ウ医研は、JTと共同で、ウ医研の有するウイルスを利用した疲労・体力の測定法と、JTの有する新規アビジン様タンパク質およびその関連技術とを応用し、家庭用および開業医用への普及も見据えた、疲労度の評価および潜伏タンパク質の定量を可能とする技術の開発を目指します。